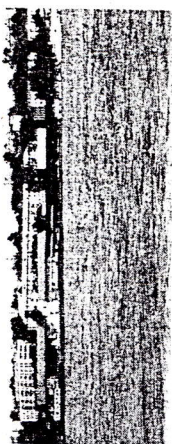


石の山他ニアト

長瀬 隆

昨年四・五月私はベルリン、バルト三国、チェルノブイリの旅をした。前半のバルト三国は、私自身それに参加しているわが国の市民平和運動の団体が企画したもので、後半のチェルノブイリのほうはNHK広島支局の取材活動に加わったものであった。双方を通じて行をとともにした人に広島大原爆医療研究所の佐藤幸男教授がいた。バルト三国のうちでもっとも印象深かったのはリトアニアであった。なにしろ一九四〇年にスターリンによって強引に併合(実際には侵略)を余儀なくされて

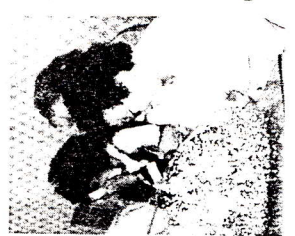


以来、ずっと絶えることなくゲリラが武装闘争を続け、大戦を経過して、五〇年頃に大弾圧をうけてやっと終息したという国なのである。とはいえ独立への希求は止むことはなく人々の心に生き続け、一九八九年には隣接するラトヴィア、エストニアとともに「人間の鎖」を組織し、立ち上がった。首都ビリュニスの中心部に、共和国の大ききとは不相応に巨大なKGB(ソ連国家保安委員会)の建物が、クレムリンが弾圧にいかんが慮し、また多くの人員を注がなければならなかったかを物語っていた。その最後のものが一月の流血の弾圧であった。私た

ちはその数カ月後に訪れたわけであり、強烈なクレムリンとロシア憎しの感情の垣根のなかに入りこんだのであった。ロシアと隣接もしくは近接し、その支配下に落ちたり、また戦ったりした歴史を持つる国には共通した観念の感情がある。フィンランド、ポーランド、トルコがそうである。旧ソ連邦にあっても、バルト三国、ゲルジャなどがそうであった。その根底にあるのはるか東方にあって、口露戦争によって強大なロシアを打ちのめしてくれた国のイメージである。また近年では奇跡的な経済成長を成し遂げた国のそれである。バルト三国はロシアではさんざんに辛酸をなめてきたので、他国のロシア・アレクギーについては敏感である。日本の北方領土問題についてはインテリはみんな知っており、全員が日本の肩をもっていた。それは日本に彼らを迎えた場合にも感得されたのであるが、現地に滞在して鮮烈な印象を受けた。

私たちの受入れの住にあつたのは国会の環境問題の委員長を務める五代の婦人であったが、案内されてイグナリナの原子力発電所(チェルノブイリと同型)を見学視察した際、その往復で六時間を要した車中で彼女は、一行のなかでロシア語を話す唯一の日本人であつた私をつかまえて離さず、休むことなく情熱的に語り、私は感涙にくたびはてたものだった。私は北方問題につ

いて大いに問われ、真剣に答えたのであったが、「北方領土」について答えていて、「サハリンはどうするのです。あれも日本のものでしょう。今のままでよいのですか」と問われて、一瞬黙した。言外に「日本人はその程度の(弱腰の)人たちなのですか」と

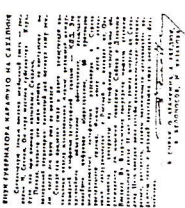


いう詰問の調子が感じられたからであった。山陰で、日本のことであつて、私は自分が樺太の生まれ育ちであることはまだ話していなかった。そして虚を衝かれたまま、なぜ何も答えることができず、そのまま翌日にはビリュニスに後にしたのである。

それから一年半を経過したが、私は今も彼女の言葉にひたかりながら、樺太はどうして日本の世論のなかで片隅のまた片隅の存在に追いやられてしまったのだらうと考えている。「(樺太)連盟を支えてきたのは、サハリン南部(南樺太)はわが国固有の領土であるという一貫した主張だ(衛藤会長談。樺連情報五〇号)とのことである。確かにこの信念なしには樺連を維持して行くことはできなかったらう。「リトワ(民族の言葉ではそう呼ぶ)はリトワ人のもの」という信念を彼らリトワ人は五十年にわたって抱き続け、一九九一年末ソ連の崩壊とともに独立を達成した。私は、樺太が失われてから、五十年にはまだ間があることを思わざるを得ない。そして最近私は、この先数年

のうちにロシアとサハリンはすでに見た以上の効果が生ずると予想するのである。

たとえば「四島は一島も返すな」と狂奔し、モスクワの保守派と組んでエリツィンの訪日を阻止したサハリン洲知事フョードロフは、日本企業への誘致に努めつつ、他方、ロシア人仲間の内輪の席では「日本の活発な経済進出が続くならば、我々は五年後には全クリル(下島)諸島を、そして十年後にはサハリンを失うだろう」(サハリン洲知事紙。九月三十日「朝日」による)と危惧している。その片腕といわれるシレンコ副知事にいたっては「日本にすぎる必要はない。日本はいつか我々を植民地と見なすだろう」(二五日、ロシアサハリン紙。同)とまで心配している。日



ソ連の新聞
サハリンの新聞

本との経済格差のあまりの大きさが言わしめるのである。領土での弾圧と長哀するこの弱気を私たちは冷静に見つめるべきなのである。私はかねがね樺太問題の全ロシアのためには、敗戦の年の留滞沖の三船を攻撃した潜水艦の国籍の特定が不可欠であると考えてき、それがソ連のものであると確信することを拙作『樺太よ遠く孤独な』(八四年・西田書店)のうちに記した。執筆に先立って、対日戦に従事したソ連将軍たちの戦記を読んで、「我々はサハリンから北海道への物資の輸送を阻止した」という記述に出会い、間違いないと判断したのである。それがやはり一連のもので

あつたことが、ついにロシア海軍の資料によって解明された。この事件にはスターリンによる対日戦の本質が露呈している。樺連はすでに動き始めているとのことであり、世論に及ぼす影響も多大であろう。サハリン残留邦人一時帰国促進会(会長の遠山美知さんとは私と同じ遠洲村出身の先輩である)のおかげで樺太が一般の話題となり、そして今、船の悲劇の真相が明らかとなった。ロシア経済の破局によって、樺太を含む広い意味での北方領土に新しい劇的展開が望見されている。

リトアニアの国会議員の婦人よ、サハリンは日本名では樺太というのですが、そこに生をうけた日本人は、その地を忘れているわけではないのです。

(泊中 同生・山崎市在住)

第六代長官の 令孫樺太へ赴く

昨年十二月、第六代樺太市長清水井次郎氏(大正八年〜十三年在住)の令孫、関戸芳氏(KDD計画第二部次長)が本部に来所し、樺太訪問の土産話を披露した。氏は勤務先KDD(国際電信電話株式会社)が、日本とロシア極東地域間の電話サービスを開始するに当り、十一月に視察の為派遣されたものであるが、暇をみては長官邸跡を尋ねたり、祖父の遺跡を調べ、社会政治紙であるソビエトサハリン新聞にもニュースとして紹介された。

KDDの計画によると、認可取得後本年一月上旬から取扱いが開始され、ダイヤル料金は毎分間で一、〇三〇円になる予定である。なお、同氏は来所時直ちに樺連会館の中心をされた。



<上>

ゴルバチョフがきた東京に在り、北方四島の返還が成るかどうかが日本がかたずをのんでいた四月十八



長瀬 隆

敗北・挫折感が支配

「メーデー」も様変わり

行した。壁はすっかり取りび、そこから対岸のエストに在り、北方四島の返還が成るかどうかが日本がかたずをのんでいた四月十八にほんの一部が残されていに従事した青年たちがつくるにすぎない。東ベルリンの委員会と医療関係者の集

自国の問題と日本のそれとの共和国議会の環境問題委員を代表する関係にあると考えていることは知っていた。しかししるかにエストニアまで来て、こんな唐突な質問に遭遇するとはつゆ思わず、即答できずにいると、「もちろん、冗談です」と相手は笑った。かの「人間の鎖」の道路を南下し、ラトビアのリガで厚生次官らと会見し、リトニアのビリニニスに至る。五月九日はドイツが降伏した日であって、ソ連では「勝利の日」と呼ばれ、やはり祝日である。キエフではその前日の午後、車のなかで案内者が広場を指し示し「例年ここで祝いの集民運動により建設中止となが、明日はなにもありません」といった。「(それは)中、私は婦人委員長的情熱的に止めることのない語りに付き合う機会をもった。四島だけではないので、日本人は、サハリだがその声に力はなかつた。彼女によれば、日本

のマルクス・エンゲルス公に出席した。後者の集まった。到着の夕べにフランス

の対ソ要求は控えめなものであって、それにさえ応じ

りでの会食の席においてで

であって、それにさえ応じ

あった。並んで座る配偶者

ないゴルバチョフは、まて

を指しつつ「妻はクナシリ

とにもって悪く、その党歴

島を生み出すが、四島が

には炭鉱労働者ストライキ

日本領になったら、彼女は

の流血の弾圧があり、それ

後から始まる。しかし、一

に、挫折感である。

月にソ連の内務省部隊によ

代わって今日のソ連を支配

る流血の弾圧のあったヒリ

とを、まったく言わなかつ

った。ソ連から分離独立を

であり、挫折感である。

ニニスでは、その日の朝、

た。彼女によれば、日本

目指すバルト三国の人々が

た。彼女によれば、日本

日ソの領土問題に熱い視線

た。彼女によれば、日本

